科目分類	いのち・人間の教育			開講学科	看護学科
科目番号	学年	配当セメスター	区分	単位数	授業時間数
18016	2	後期	選択	1	15
授業科目名 (英文)	比較文化論 (Comparative Studies on Culture)				
担当教員名	森　雅文				

授業の概要及び到達目標

病気とその治療やケアをめぐる文化の比較を通して、医療の文化・社会的側面について学習する。同時に、日本の医療文化を相対化して、これからの社会を支える「医療」と「看護」」の可能性を考察する。近代医療の使命は「治す」ことにあったが、超高齢社会を迎える日本では、病気や障害とともに歩むことを「支える」医療への転換が求められている。そのヒントを、諸文化の医療実践の中に見出していく。

講義では、異なる時代や地域の文化への見識をきっかけにして、自らが基盤とする生活文化を見つめ直す。自らが目指す医療実践を「文化」という視点から振り返り、そのリアリティがどのように創られているのかを考えることで、自己と他者をめぐる実践を支える洞察力を養う。

準　備　学　習　等

予習と復習は、授業時に指示するが、毎回のテーマに沿った用語や事項についての下調べや確認、自分の身近な経験を文化として振り返るようなエクササイズを課すことで、自らの「当たり前」や異文化に向けられる「偏見」について考え直す機会とする。ただし、「学ぶ」ことは他人から与えられる作業ではありません。自らの不足を自覚して補う実践であってほしいと考えています。

成績評価の方法	授業の進行に合わせた小テスト（40%×2 回を予定）と課題（20%）。 授業時の質疑応答やコメントペーパーの内容点などは平常点（加算点）として考慮する。
テキスト	特定の教科書は使わない。 毎回の授業時にプリント資料を配付する。
参考図書	（※）波平恵美子編『系統看護学講座　文化人類学』医学書院 浮ヶ谷幸代『身体と境界の人類学』春風社 そのほか授業時の配布プリントで適宜に紹介する。
備　　考	授業は講義形式だが、質疑応答をまじえてすすめるので、授業中の質問や意見なども歓迎する。小さな疑問でも臆することなく、自らで調べて考えてみるという心構えをもって、授業に臨んでほしい。 質問等は授業終了後、教室で受け付ける。

授　業　計　画
第１回　文化としての「病気」 「風邪」のような身近な病気の経験を事例にして、病気や治療の経験を「文化」という側面から捉えるための基本的な考え方と、文化を比較するときの留意点として現代社会で求められる自己と他者（異文化）へのまなざしについて学ぶ。 第２回　儀礼としての「治療」 呪術の治療儀礼や現代の医療ドラマを例に、「病気」や「患者」という経験の意味について理解を深めて、病気と治療の文化・社会的側面を考察する。 第３回　伝統医学の世界観２：東洋医学 漢方薬として日本でもなじみ深い中国の伝統医学の考え方について、現代医学とは異なる身体観、医療観を焦点に講述し、医療文化とコスモロジー（世界観）の関係を学習する。 第４回　伝統医学の世界観１：インド医学 インドの伝統医療アーユルヴェーダの考え方について、民族宗教（ヒンズー教）との結びつきを通して、伝統医療の生活文化としての側面を学ぶ。また、国際保健の枠組みにおける伝統医療の再評価についても学習する。 第５回　西洋医学の人間観 現代の臨床医学の基盤となった西洋医学の歴史を概観して、その独自の（私たちには馴染み深い）人体観・生命観がどのようにつくられてきたのかを学ぶ。 第６回　死と弔いの文化 死を弔うのは人類の特徴である。水子供養や口寄せという伝統的な信仰から現代のエンジェルメイクまでの幅広い事例をみて、ケアとしての「弔い」を考察する。 第７回　老いと障害 現代医療は、成長を謳う近代の時代文化として育まれた。その歴史潮流を踏まえてから、老いや障害という実践への医療文化のあり方を考える。 第８回　健康のパラダイム・シフト 人口減少と超高齢化を迎える 21 世紀の日本人に求められる「医療・看護・福祉」の可能性を考察する。 ※ 授業の進捗状況や、受講者の関心にあわせて内容の一部を変更する場合がある。